

外間ゼミ27年間の歩み

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

51

(開始ページ / Start Page)

125

(終了ページ / End Page)

133

(発行年 / Year)

1995-03-24

外間ゼミ27年間の歩み

内田喜美子（旧姓・西條、一九七一年卒）

学園紛争の嵐の吹き荒れる中、ノンポリとはいえ外間ゼミの一員として返還前の沖繩の意味をかみしめ乍らオモロを読んでいます。

大教室での言語学講座に於て沖繩戦・降伏・捕虜生活の様子を話された折の先生のお姿は忘れられません。長期ロックアウトの為に近くの喫茶店や先生のお宅に伺つてのサブゼミに我々は燃えていました。外国であったオモロの国は憧れの地であり、先生を通してしか知り得ない世界でした。

竹内 喜子（旧姓・小浜、一九七四年卒）

あの頃、大学はロックアウトされ外間ゼミは先生のご自宅で行なわれました。四人の学生しかおらず、教材は新聞のコピーで琉歌でした。家庭的な雰囲気、終わると駅送って下さり昼食を頂いて帰ってきました。私の周囲には苦学生が多く、志の高い方ばかりで良く勉強をなさっていました。オイルショックの影響もあって不安定な世の中でしたが、先生の回りだけは何時も静かで別世界のように感じました。荻窪の駅に降り立つといまでも懐かしく学生時代を思い出します。

佐野 千春（旧姓・田村、一九七九年卒）

穏やかな眼差し、柔かな語り口で学生たちと女性論を交わす教授。「君はスカレットとメラニーどちらが好きですか。ぼくはメラニーが好きだな。スカレットは結構いるんですよ。でも、メラニーは少ないね。」

ところが、いざライフワークの研究に對するとき、エネルギー溢れる情熱の人となり、その真摯なる姿勢には、周囲も身の引き締まる思いをする。外間教授は真摯なる紳士そのものである。そして、当時、法政大学文学部において一際チャーミングな教授であった。

鶴本みゆき（一九七九年卒）

大学を卒業して十数年。ゼミと言われてまず思い出すのは教室の風景です。それもなぜか曇りや雨の日もあつたはずなのに、必ず陽ざしの差し込む教室なのです。これもひとえに先生のお人柄によるものだと思います。

また沖繩での講演会への参加、お年始に先生のお宅におじゃましたことなど講義以外の思い出が多いのも私には印象深いのですが、その反面、先生の知識をもっと貪欲に吸収しなかつたことを反省してまいります。

若本 和秀（一九七九年卒）

「これでは論文の体をなしていないね。」
私は顔面蒼白となって、先生の言葉を聞いていた。卒業論文の口頭試問である。実際、論文が十分にまとめ切れていないことは、私にもわかつていた。今年は卒業できないだろうと、覚悟を決めた。

ただ、外間先生は、その後、次の言葉をお忘れにならなかった。「ところで、内定は出たのかね。」

私は、ある業界の新聞社から内定が出ていることを答えた。さらに、「それは、君の希望していたところかね。」とお尋ねになった。

心優しい外間先生は、就職が決まっていなかったり、不本意な会社だったら、もう一年勉強させてやろうとお考えだったのだろう。

こうして、卒業論文は何とか合格点をいただいた。

幸いにも、その後、私はある私立学校に国語の教員として採用された。あれから十五年経つ。

片岡 定治（一九八〇年卒）

外間ゼミの思い出は十四年前に遡ります。私が外間ゼミに入ったのは級友の助言があり、外間先生のお人柄が良いと聞いたからです。また、ゼミ合宿が「沖繩」ということも魅力でした。でも野球部に在籍（主将・三塁・一番打者）していたので沖繩には行けず残念でした。三年生の終り頃、先生が海外研修に行かれると聞いて目の前が真暗になりましたが、結局卒業論は外間先生が評価してくださり安心したのも懐かしい思い出です。

外間ゼミの大学院生たちにまじって草野球の試合に出たこともありました。私が投手で、外間先生は三塁手、三番打者でした。懐かしい!!

門司エリ子（旧姓・柳下、一九八一年卒）

外間先生に「大江健三郎の見た沖繩文学世界」という卒論を御指導頂いてから、何年経つことでしょうか。現在、私は主婦として、先生の学術的な御研究から掛け離れた日常を送っています。しかし、今で

も大きな問題にぶつかり、何らかの判断を迫られた時、先生から教えを受けた基本的な理念が、確実に生かされていることを感じます。人を思いやる温厚な人柄の中に強靱な精神きょうじんを持たれた先生から教えて頂いた事は、数限りなくあります。我が生涯、最大の師であると、私は思います。外間守善先生、本当にありがとうございました。

石脇 匡子（旧姓・望月、一九八三年卒）

外間ゼミの思い出としてまず頭に浮かぶのは、外間先生の温和な笑顔です。その当時学生の間で仏のゼミと言われていた先生の講義は、沖繩文学初心者私にも入りやすく、興味深いものでした。卒業して十二年、オバタリアンになった今でも、恩納なべの歌を思い出す事があります。

ゼミの雰囲気は小規模でアットホームでした。私が三学年の時、千葉へゼミ合宿に行き、夜遅くまで先輩達のいろいろな話を目をこすりながら聞いていた事が、学生生活の楽しい思い出として残っています。

長井 洋子（旧姓・井上、一九八六年卒）

ゼミの思い出といえば御多分にもれずゼミ合宿。中でも強く印象に残っているのは、先生と御一緒した「健児の塔」で伺った沖繩戦のお話である。銃弾の跡あとが黒々と残る場所で語られたそのお話は鳥肌の立つほど生々しいものだった。思い描くそのむごたらしい情景と、淡々と話される先生の穏やかなお声とが相重なって私の中で一杯になり、溢れる涙をおさえる事が出来なかった事が思い出される。先生のお優しいお声とエメラルド色の海が、今心底懐かしい。

入澤 幸世（一九八七年卒）

その穏やかな口調、何もかも包み込む様な眼差し、時折見え隠れする熱い内側——講義の時、ゼミ生の結婚式でのスピーチの時、まだ独身の私に何をモタモタしているのとおっしゃる時、ジュースを飲みながら昔（？）を語られた時、ゼミで私の好きな花風の琉歌を歌われた時、私達が差し上げた花束の中にあつた真紅の薔薇が好きだとおっしゃった時、満々と豊かに水を湛えた河のように、その懐に全てを抱き周囲を潤し続ける。

白田 典子（一九八七年卒）

外間ゼミの合宿は、最も沖繩らしさの感じられる夏に行われます。女流歌人恩納なべの琉歌のような情熱的な抒情をはぐくんだ土地を、目で見て、肌で感じることで、私達にも琉歌が理解できるのでしよう。そして、沖繩の空のように明るく、カラッとして、親しみやすいのが外間先生でした。そのお人柄のおかげで、未知の文学であつた沖繩文学を楽しく学ばせて頂いたことが忘れられません。懐しい思い出です。

藤田 博子（一九八七年卒）

ウンナダキアガタ サトゥガンマリジマ……

修学旅行、沖繩でのバスの中、ガイドさんが向けたマイクに思わず口ずさんだ琉歌。後ろの生徒達のぼかんとした顔に苦笑してしまいました。十余年間、心に刻まれていた沖繩への憧憬。外間先生が熱心に語って下さったナビィや思鶴の切ない心は、私自身の青春でもありました。

今、生徒と共に「古事記」や「万葉集」を学ぶ時、私は「おもろ」

や「琉歌」を語らずにはいられません。竹富島で出会った上勢頭さん、ユタのおばあちゃん。ゼミで過ごした日々は、私のかげがえのない「宝箱」です。

石川 真紀（一九八七年卒）

外間ゼミでの思い出といえば、何とんでも沖繩へのゼミ旅行である。「独りで南部を巡りたい。」とわがままをいった私に、先生はいろいろと配慮下さった。おかげで私は、自分の興味を十二分に満足できたのだ。

他にも、デキの悪い私は、いろいろと先生に甘えていたように思う。しかし、先生はいつも、おだやかな笑顔で受けとめて下さった。

あの笑顔が、もう大学では見ることができなくなるのはとても寂しい。先生、いろいろとありがとうございました。長い間、お疲れさまでした。

小倉 り佳（旧姓・大矢、一九八八年卒）

「ここは開かずの扉でした。」と記された名刺があります。これは、学祭時、華道部展の開くのが遅れてしまい、先生が入口に挟まれていかれた物です。

実は、先生が来て下さるはずは無いと思いつながら出した招待状でした。それだけに、今でもキュンと胸が痛くなります。同時に、学生に對する本当のやさしさをしみじみと感じます。先生が益々好きになつた出来事でした。

この名刺は私の宝物です。

石井 淳子（一九八九年卒）

先生の思い出といえば、映画『昼下りの情事』である。何がきっかけでそういう話になったのか、今となっては定かではないが、その日、先生はこの映画を見に行かれた事を話された。タイトルの日本語訳が不満である事や、この作品の中でのヘップバーンの魅力を語る先生は、ふだん講義で沖縄文学を熱っぽく語る先生とは全く違った表情だった。そして、グムーンライトセレナーデをちよつとてれながら口ずさんだ時は、映画好きのステキなおじさまに変身してしまった！
そういう訳で、私の「外間先生の思い出」は、グムーンライトセレナーデとともにあるのです。

田中 大作（一九九〇年卒）

外間ゼミの思い出と言えば、三年の学祭にゼミで屋台を出した時の事が思い出されます。三年が中心となり仕入れ、屋台作りなどをやり、「守善」と名入れたのれんや、トレーナーを作ったりしました。「文学の旅」では琉球舞踊を見学したり、琉球料理を食べに行ったり、自由時間にはダイビングをしたりと、とても楽しい旅でした。また機会があれば先生と一緒に学生時代のように旅行をしたいと思いません。

小林 泰子（一九九〇年卒）

私はあの日、卒論の清書をしていた。突然の右下腹部の激痛。いつもの食はずぎと思つて清書が続けたが、イタタ、脂汗が出る。視野狭窄、思考停止、意識朦朧。とうとう病院送りの身となった。診断の結果は腹膜炎を併発しかけた盲腸、即手術だった。卒論が完成するまで

待てないかと聞くと、そんな余裕はないと言う。私は止むを得ず翌日の手術を受けた。すぐに清書を再開したのが災いしたか、退院に三週間もかかった。口述試験当日、卒業は半ば諦めていた私に、外間先生はいつもの優しい笑顔で、大変だったね、なかなかよく書いています、と言つてくださった。先生の温かい言葉に感激した。こうして私は卒業した。しかし社会人としての生活はあまりに厳しく、あの時落第した方が良かったかと思うこと数知れず。先生のご恩を思うと我が身のていたらくを恥入るばかりである。

橋川 智美（旧姓・金子、一九九一年卒）

大学を卒業して、文章を書く事など滅多にありません。そんな私に先生は「文章は心で書くものだよ。」とおっしゃいました。私はいつも、先生との何気ない会話の中で、言葉の素晴らしさに心打たれるのです。

私が結婚を決めた時には「これからは二人の宇宙コスモスを造るんだよ。」とおっしゃいました。色々な意味が込められています。事あるごとに思い出し、私なりに考えてみます。すると、また一歩踏み出すことができます。

先生は私の心の支えです。

草田 道代（旧姓・保坂、一九九一年卒）

春まだ浅い卒論面接の日。出来はまがまず、意気揚々と面接に臨んだ私に外間先生はこう言われた。「私は今まで数え切れないほどの卒論を見たが、こういうのは初めてです。ちよつと見てごらん下さい」。訳も分からず表紙をめくる。ペらっ、目次。ペらっ、ぎよっ、いきなり

9ページ！なんで？ぺらっ、3ページ。ぺらっ、5ページ。順番めちゃくちゃじゃーん！もしかやこれで留年？せっかく放送局に受かったのに。青くなる私に先生は優しく言った。「なおしていらっしやい」。

先生、あんな卒論にAを下さってありがたいございました。おかげさまで、社内結婚をし、幸せな毎日です・・・。

青柳江美子（一九九一年卒）

沖繩文学というテーマを聞いた時に、すぐに私はゼミを決めました。法政大学に在学しているからこそ勉強できるものを探していたからです。そして、日本でありながら、異国情緒の溢れている沖繩に大変興味があつたからです。思った通りに、初めて知る世界が広がっており、先生に引率して頂いた沖繩へのゼミ合宿は、私の大学時代の忘れられない思い出になっています。そして何よりも、卒業式の日に先生のお宅で沖繩料理を作っていた事は忘れられません。

外間先生、長い間本当にお疲れさまでした。そしてこれからもお体に気をつけてがんばってください。

長峯 薫子（一九九一年卒）

私にとつての外間ゼミは、大学の四年間を凝縮したものでした。学問、探究、人間関係、ゼミで全てを学びました。そして何よりも、日本文学科の私にとって最も大切な「日本語の大切さ」を学ぶことができました。沖繩文学を通して、人間社会の中における重要な表現方法である日本語の偉大さ、言葉の持つ底知れぬ力を知り、驚き、そして更に学びたいと思いました。

何よりも外間先生のお人柄に支えられていました。いつも笑い声の

絶えないアットホームなゼミは、私にとって一生忘れることのできないかけがえのない二年間です。

浅野 智代（一九九一年卒）

外間先生、資料を集め、まとめるという作業は本当にたいへんなのですね。沖文研や図書館に通って自分なりのデータを作ってみて初めてわかりました。今までも、そしてこの先も、あれ程必死に思考することは無いと思います。卒論もゼミの単位も「卒業」がかかっていたのでたしかに必死にならざるを得なかったのですが、『琉歌大観』にもれて唸っていた日々を一番の思い出と言える私は、非常に幸せです。卒論のテーマに「きよらさの美意識」を選んで下さった先生。琉球の人々の美意識や恋の歌を熟っぽく語っていらした姿が深く印象に残っています。どうかいつまでもよしやや恩納なべを愛して下さい。私もいつまでも外間ゼミを誇りに思います。

高橋 純（一九九一年卒）

「学ぶ」というよりは「こなす」ことの多かつた学生生活の中で、唯一（？）学ぶことの出来たのが、私にとつての外間ゼミであります。とは言つても、「苦しい思い出」よりは、外間ゼミで得た一生の友人達との笑いの絶えない思い出の方が、大半を占めるのですが……。

今でも友人達と、外間ゼミ、そして沖繩文化の話に花が咲きます。外間ゼミで学んだ沖繩文化は、私にとつて一生の宝となるでしょう。

岡本 嘉子（一九九二年卒）

南は沖繩、北は北海道より集まってくる通教生の「方言」を教材に

取入れられての先生の講義は、独得のものであった。笑いの中に楽しかった思い出だけが残っている。

ノーベル賞作家、大江健三郎氏をして云わしめた、「穏やかな学者」こそ『沖繩ノート』に出てくる外間先生のことである。先生のお人柄はどなたの眼を通してみても同じ筈である。「ウリズン」の言葉の意味と共に私の心にいつ迄も残る大きな存在の先生である。

石川 具子（一九九二年卒）

ありがとう、外間先生!!

外間ゼミから巣立ち、早くも三年の月日がたとうとしています。ゼミで過ごした時間はそれはそれは、たおやかなひとときでした。好奇心と冒険心を持つてのぞんだ外間ゼミ。その思い出は沖繩の太陽、青い海と共に私の心でキラキラと輝いています。

外間先生、おつかれ様でした。そして、私から、ありったけの「笑顔」と「ありがとう」の気持ちで、エールを送ります。

門田由紀子（一九九三年卒）

「出来の悪い子程かわいい」という言葉がありますが、そんなお気持ちからでしょうか、先生には在学中、かなりかわいがって頂きました。田舎から上京し、沖繩文学どころか沖繩についてさえ全く無知であった私に、先生は、ある時は厳しい師として、そしてまたある時には本當の父以上に優しく穏やかな表情で（大部分が後者であった様に思われますが……）一から導いて下さいましたね。また、お忙しい中で、私たちのとりとめのない会話に耳を傾けて下さったり、一緒にお食事をしたりと、本當に身近に接して頂いたことを沢山、沢山思い出しま

す。それら一つ一つの思い出全てが私にとって今でも貴重な宝物です。先生、これからも私の東京のお父様として、いつまでも若々しくステキでいらして下さいね。

高野 邦子（一九九三年卒）

人生は、息の長いマラソンのようです。努力というユニホームを着て、希望というたすきを掛け、不安という風をうけながらも長い道程を走り続けているのです。ある時は苦しい坂を登り、ある時は涼しい川風の吹く橋を渡るのです。そして、ある時は人々の声援に力が甦るのです。急ぐことなく、焦ることなく自分のペースで走り続けていくように導いて下さったのは、外間先生でした。先生の未来も幸福に向かうように願っております。

柴野 雅史（一九九三年卒）

三年生の秋、初めてのゼミ旅行で那覇空港に降り立った時、頬に受けた風は、秋だというのに熱氣溢れる風でした。「ゑとおもろ」や『琉歌』に見られる「真北風」や「真南風」は果たしてこのような熱氣まじりの風だったのでしょうか。

今でも沖繩ゼミを思い出す度に、常にフィールドワークのたいせつさや楽しさを説いていらつしやる外間先生のお言葉が、沖繩の熱い風と共に私の心の中に甦るのです。

藤島 協香（一九九三年卒）

私は通教生でしたが、II部の外間ゼミに足かけ二年お世話になりました。

夏、日本語史のスクーリングで「外間先生と沖縄へ行こう」という甘い言葉に誘われてゼミ旅行に参加させて頂き、そのままの勢いでゼミにも仲間入りしてしまいました。通教生の私にとって「ゼミ」というのは憧れのまとでした。

通年生の人と知り合えたことも良い刺激となり、目標通りの年数で卒業できたのは外間ゼミのおかげだと感謝しています。

柴田 和恵（一九九四年卒）

外間先生の下で学んだ二年間で、沖縄文学への親しみと理解を深めたことはもちろん、先生が授業の合い間に話して下さるお話に、私たちの視野はどんどん広がっていった。ほんとうに私たちは外間先生の下でいろいろなことを吸収させていただいた。それは、外間先生が一つでも多くのことを私たちに熱心に教えて下さるからであり、なによりも先生がいつも私たち学生を受けとめて下さる大きな優しさをもっておられるからだと思う。

入戸野力也（一九九四年卒）

私にとって沖縄文学とは異国文化を窺わせるような文学だった。しかし、外間先生のおおらかで、質問は厳しいがフォローも忘れない、個人の意見を否定しない性格が反映したゼミのおかげで、すっかり馴染むことができた。

琉球舞踊・城跡巡りなど沖縄ゼミ旅行を通して貴重な体験もできた。特に「おもしろさうし」の世界を通して言語・宗教・社会を学ぶことができたのは一生忘れられないであろう。卒業式をおえ、先生宅でいただいた料理は美味しかった。

杉本 洋子（一九九四年卒）

外間ゼミの魅力は何よりも沖縄をまるごと勉強できることです。ゼミ合宿は沖縄で、文学や文化を探訪することができましたし、郷土料理も食べられました。沖縄独特の風土を肌で感じることもできたのです。これから外間ゼミに入ろうと思っていた人もいたでしょうに、外間先生は退職されてしまうのですね。時々、三日間じっくり煮込んで御馳走して下さった「ラフテー」の味を思い出します。沖縄文学ゼミ、外間ゼミ、私のだいじな思い出です。

河西 貴至（一九九四年卒）

「夢」「やさしさ」「きびしさ」、それらがゼミでの二年間を通して、先生からいただいたものだと思う。

とぼけた（失礼）顔をしながら夢を語り、学生一人一人にやさしく話しかけ、時には（卒論面接の時くらいか）きびしく叱咤されることもあった。

これからの人生、「夢」「やさしさ」「きびしさ」を糧に「外間守善」を感じていきたいと思う。

岩瀬 清美（四年在学）

外間先生という映画の話が印象的です。ゼミで、かなわぬ恋やせつない思いのこもった琉歌が取り上げられると、その様な内容の映画の話をして下さいました。最近では、「日の名残り」という映画の話をして下さって、話の中から先生の人に対する情の深さが感じられました。先生はいつでもゼミ生一人一人を気遣い、声をかけて下さる温かい先生で、このゼミに入り、二年間先生の下で勉強できたことを私は

幸せに思っています。

飯塚 直（四年在学）

外間先生は格好いい。確かに外見は好々爺ですが、生き方が格好いい。トレードマークのバーバリーのコートだつて見栄や伊達で身に着けている訳ではない。もつと純粋な気持ちであのコートを選んだ（らしい）のです。

そんな外間先生ですが、私には解せない部分もあります。何と先生は巨人ファンなのです。しかも川上哲治の時代から。仮にも沖縄文学を担当するのなら阪神ファンでなければ。仲田と石嶺という沖縄の英雄二人がいる阪神を。

川上 由紀（四年在学）

外間先生は、私にとってとてもこわい存在の方の一人です。別に叱られたことがあるわけでなく、むしろ先生はいつもにこやかにされているのですが、何か私の心の中まで見透かされているような気がするのです。先生に見つめられると、もう私は蛇ににらまれた蛙のようになってしまい、話す言葉もしどろもどろになってしまいました。先生とお話をする時の私の心臓は、好きな人と話をする時よりずっとドキキしていました。

須賀 由裕（四年在学）

先生は、ゼミ合宿のとある席で、私達にこうおっしゃってくださいました。——僕にとつての最初のゼミ生と最後のゼミ生は、強く印象に残ってしまうんだなあ。だから僕は何かあつても君達の味方です——

！。もうこの言葉だけでも十分心強いのですが、この二年間で先生から教えて戴いたこと（カラオケを含む）が山ほどあり、鬼に金棒です。先生は、今度またヨーロッパに行きたいそうです。きつと数十年先も元気に飛び回っていることでしょう。

浦山 純子（四年在学）

「沖縄を学べる大学に進学し、沖縄旅行に行つて、沖縄を題材とした卒論を書く——」

高三の四月に修学旅行で訪れた沖縄の魅力にとりつかれた私が、目標としたことです。あれから四年数カ月、一つずつ夢に近づき、今、ようやく目標を達成しつつあります。

外間先生という素晴らしい師にめぐり逢い、沖縄を学ぶことができ、大変嬉しく思っています。二年間という短い間でしたが、ご指導、どうも有難う御座いました。お元気で。

川井 幸雄（四年在学）

沖縄に対する興味、ただそれだけで飛び込んでいった外間ゼミ、果して授業についてゆけるのかと不安を抱きながら学び始めましたが、そんな不安を払拭してくれたのが、ゼミの仲間、そして外間先生でした。温かみのある授業、そして何より、常に生徒と同じ目の高さで対話して下さったこと。私にとつては忘れることのできない貴重な二年間でした。先生と共に卒業を迎えた今、素直な気持ちで言えます。「ありがとう外間先生、ありがとう沖縄」

柏田 美帆（四年在学）

一昨年四月のゼミ見学が、外間先生との最初の出会いでした。沖縄学界を代表する高名な先生でいらっしやるにもかかわらず、私達学生に対しては非常に気さくに、また熱心に指導して下さい、ただただ感動するばかりでした。三年時の沖縄ゼミ合宿中、「琉球舞踊の夕べ」で、帽子をかぶり踊っていた外間先生のキュートでお茶目な姿は今でも目に焼きついて離れません。外間先生、今までどうもありがとうございます。

長谷川貴子（四年在学）

週一回の授業が待ち遠しい。そんな気持ちになれるのはやっぱりゼミの時間でした。そもそも私が外間ゼミに入ろうと思ったのは外間先生にホレたから。「このゼミしかない」という直感のようなものを感じたのです。沖縄文学はとても難しく、レポート発表のときは泣いていたけれど、外間先生のお話を聞きたくて、ゼミの人たちに会いたくて、という気持ちの方がずっと大きかったと思います。良い先輩・後輩・友人に、そして外間先生に出逢えたことを本当に嬉しく思っています。いつまでもお茶目な外間先生でいてくださいね。

半澤 直美（四年在学）

入学直後の大病、退院一ヶ月後隣家の出火で家は全焼。家族の無事がせめてもだったがおかげであの頃は大学どころの騒ぎではなかった。通教生でもあり、ゼミ生としても外間先生には気長に見ていただいた。五年前最愛の母を亡くした際、ピークに達した私の悲痛は、先生の励ましが無ければ立直る術を見失ったままでいただろう。我が再生の師『外間守善』という大いなる力の導きで、今ニライカナイをめ

ざし新たな旅立ちの時を迎える。

下地賀代子（修士課程一年）

それは大学院の面接試験の時。控え室に突然現れて、私の出身地等を尋ねられ、自らは名乗らずに去って行かれたその方が、面接会場で外間先生だと紹介された時は驚きました。一年限りだとその場で念を押され、その時は気落ちしたのですが、先生が自らの説を淡々と瞳を輝かせて語られる時、やはり先生のもとで学べて良かったと思うのです。それに学問以外にも大事なことを、先生のお人柄から学ぶことができるのですから。